View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

愛知大学公館の変遷
―師団長官舎時代からのエピソード―

佃　隆一郎

要　約：愛知大学豊橋校舎から北に少し離れた場所にある同大学公館は、現在は使用されていないが建築後100年を超えた建物であり、愛大設立前の戦前には第十五師団長官舎など、旧陸軍によって使われていた。官舎時代も公館時代も、豊橋地区や愛知大学にとって興味あるエピソードを残しているこの建物について、今後の再活用を視野に入れつつその変遷を概述する。

キイワード：第十五師団、師団長官舎、久邇宮良子女王、田中国重、陸軍教導学校、陸軍予備士官学校、愛知大学、本間喜一、小岩井多嘉子、旧軍遺跡

はじめに

2012（平成24）年に開校した愛知大学新名古屋（ささしま）キャンパスは、名古屋駅の近くに建設されたことにより、新幹線をはじめとする列車内から“愛知大学の存在を知らしめる”絶好のランドマークとなっている。

ただ東京方面から名古屋に新幹線で向かう場合、その手前の豊橋駅に入る直前に、“先に見える愛大の看板と建物”が車窓左手にあることは、あまり知られていないであろう。たしかに目立たない存在であるが、古い洋館風のその建物こそが、現在は使われていないが、元来旧陸軍第十五師団長官舎として100年余り前に建築された「愛知大学公館」なのである。

愛知大学の「公館」についての一般的な認識としては、（とりわけ豊橋キャンパスに旧陸軍の建造物が複数残っている事実に対して）あまりされていなかった面はあろう。しかし、1981年に中日新聞本社から刊行された、日本建築学会東海支部歴史意匠委員会編『東海の近代建築』では、東海４県下の（その時点での）現存各近代建築物のうち愛知県の項に「愛知大学（旧第十五師団）」も設けて、公館にもこう言及している。

> 大学から北へ約500㍍離れた東海道新幹線寄りの小高い丘にある旧師団長官舎は兵舎の建設と同時のものと見られるが、いま愛知大学公館となっており、教職員宿舎などに使用されている。この建物には、大正６年第十五師団長として久邇宮が着任され、良子さまも豊橋で生活されることになった。（1）

この説明文の後半にある“久邇宮と良子さま”は、当時の久邇宮（くにのみや）家の邦彦（くによし）王と、その娘でのちに昭和天皇の皇后と（天皇崩御後香淳皇后に）なった良子（ながこ）女王のことであり、のちに「軍都」として回顧されるようになった戦前の豊橋を物語るエピソードとしてかなり認

識されてきたようである(2)。そしてこの度、公館が建築から100年を迎えたことで、愛大内の東亜同文書院大学記念センターの業務で公館についてある程度調査する機会を得たことから(3)、豊橋市内に残る貴重な近代建築物の一つとなった一方で、現段階ではいまだ活用されていない形になっている「旧師団長官舎→愛大公館」について、その変遷を概述してみたいと思う。

1．第十五師団長官舎としての建設

・豊橋独自の建築となった第十五師団長官舎

日露戦争末期に千葉県習志野で編成された旧陸軍第十五師団は1908（明治41）年、当時渥美郡高師（たかし）村であった豊橋南郊に新たに建設された衛戍（えいじゅ）地（駐屯地。現愛大豊橋校舎およびその周辺）に進駐したが(4)、北側に離れて建築された師団長官舎の竣工は４年後の1912年５月７日であった。すなわち、官舎建設は一連の師団関連工事の最後となったのであるが、師団進駐後しばらくは、市内南部の大字花田正林寺東に造られた施設が師団長の官舎として暫定使用された（新官舎完成後は旅団長官舎に転用）(5)。

豊橋地区に新たに建設された第十五師団長官舎は、洋館と日本館とを巧みに折衷した平屋造りであり、前面の公的部分に洋室を、背後の私的部分に和室を配した。洋室にはシャンデリアや暖炉が設けられ、外観では張出し窓や赤レンガの煙突がアクセントになっている。また、第十五師団と同時に各地に進駐した師団の各官舎は、それぞれ異なる趣向が施されたことから(6)、画一・統一的な設計・デザインとなった各司令部とは対照的に、各地区の官舎は独自性や個性を前面に出すことになった。ただし、官舎はあくまで師団長個人の仕事および生活の場であって、師団の存在が観光の目玉になった豊橋にしても、（司令部ほか“本拠地”から少し離れたこともあってか）官舎が広く宣伝されることはなかったようである(7)。

近年の愛知大学公館
（愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵）

・第十五師団長と「皇后の少女期豊橋居住伝説」

第十五師団長官舎建設が関連工事の最後となり、同師団が第一次世界大戦後の国際情勢などにともなう軍縮によって廃止となったことから、のちの愛大公館に実際に十五師団長が居住していたのは、1925（大正14）年までの13年間と、比較的短期間に終わった。

その短い間ながらも、７人の中将が歴任した師団長（表１参照）のうち、皇族であった久邇宮邦彦王第７代（豊橋進駐前からの通算）師団長の長女は、のちに昭和天皇の皇后、良子女王であり、父の十五師団長在任時、ともに官舎で暮らしていたことがあると「はじめに」で述べた。ただし、同女王は日常的に豊橋に在住していたのではなく、実際は東京の学校の長期休暇の際しばらく滞在していたのに過ぎなかったようであるが、その間に皇太子、すなわちのちの昭和天皇との婚約が内定したのであり、その後皇后になったのにつれて、豊橋の学校に通っていたという伝説が地元で生まれることになった(8)。

また、廃止時の田中国重第10代師団長は、着任前年にはワシントン軍縮会議に派遣随員として参加した経歴を持っていて、軍縮が討

議された場と、実際に行われた場の両方に立ち会った人物であった。田中は師団廃止の際の告別式で、廃止が陸軍の装備改善のためのやむをえないものとして、住民に理解を求めているが、後年右翼団体幹部になった彼自身は（軍縮実行者の宇垣一成（うがきかずしげ）陸軍大臣の反対派閥に属していたこともあって）軍縮全体を憎悪しつづけることになった(9)。

いずれにしても「皇后伝説」と施設を残したまま、第十五師団は軍縮という世界的潮流のなか、豊橋の地から消えたのである。

・師団から教導学校、予備士官学校、さらに愛知大学へ

第十五師団の廃止後「空き地」「空き家」が数多く発生したことは、「軍都」からの転

・第十五師団期（1912 ～ 25年）

氏名（いずれも中将）	在任期間	備考
内山小二郎	1909. 1.14 ～ 1912.11.27	在任中に官舎竣工
井口省吾	1912.11.27 ～ 1915. 1.25	
由比光衛	1915. 1.25 ～ 1917. 8. 6	
久邇宮邦彦王	1917. 8. 6 ～ 1918. 8. 9	
尾野実信	1918. 8. 9 ～ 1919.11.25	
市川堅太郎	1919.11.25 ～ 1922. 8.15	
田中国重	1922. 8.15 ～ 1925. 5. 1（廃止）	

・陸軍教導学校期（1927 ～ 41年）

氏名（階級）	在任期間	備考
武田秀一（大佐→中将）	1927. 6.30 ～ 1930. 8. 1	
川原　侃（大佐）	1930. 8. 1 ～ 1932. 9. 1	
林　茂清（少将→中将）	1932. 9. 1 ～ 1935. 3.15	
中井武三（少将）	1935. 3.15 ～ 1936. 3. 7	
常岡寛治（少将）	1936. 3. 7 ～ 1938. 3. 1	
伊藤知剛（少将→中将）	1938. 3. 1 ～ 1939. 8. 1	
石黒貞蔵（少将→中将）	1939. 8. 1 ～ 1940. 8. 1	予備士官学校長兼任
古閑 健（少将→中将）	1940. 8. 1 ～ 1941. 9. 1	予備士官学校長兼任

・陸軍予備士官学校期（1941 ～ 45年）

氏名（階級）	在任期間	備考
小田健策（少将）	1941. 9. 1 ～ 1942.12.14	
永沢三郎（少将）	1943. 3. 1 ～ 1944. 7.14	
早渕四郎（中将）	1944. 7.14 ～ 1945. 8.31（閉校）	

〔表１〕師団長官舎竣工より終戦までの歴代師団長・校長

・第十五師団の豊橋進駐前および、師団長官舎竣工前の師団長は省略。
・陸軍教導学校と同予備士官学校が師団跡に併存していた時期（1939 ～ 41年）は、表内のように校長は両学校を兼任していたが、ここでは該当校長は教導学校に組み入れた。また、豊橋市内西口町に移った教導学校が改編された「第二予備士官学校」の校長については省略。

換に迫られることになった豊橋地区にとって大きな問題となったが、師団長官舎についてはほどなく、陸軍大臣側からの見返りに新設された陸軍教導学校や予備士官学校の校長官舎に再用された(10)。

教導学校は、1925年の陸軍軍縮によって師団が削減された一方で、軍隊内の下士官を教育するために翌々年に新設された機関であり、設置場所の一つであった豊橋では第十五師団跡の一角が転用されたのである。豊橋の教導学校は日中戦争が長期化した1941年に、戦時下に指揮官を臨時養成するための予備士官学校に全面移行したが、その過渡期には教導学校長が予備士官学校長を兼任した。

そして戦火は太平洋戦争へと拡大し、官舎のそばには防空壕が構築された(11)。その末期の米軍機による空襲では、豊橋市街地や豊川海軍工廠が壊滅するにいたったが、豊橋市南部の予備士官学校など軍施設の損害は、官舎を含めて軽微であった。そして日本の敗戦による旧軍解体後、豊橋の関連敷地・施設はひとまず市の管理下に置かれ、学校など各方面に転用する構想が出され、旧官舎は迎賓館にする案が発表された(12)。しかし最終的には、やはり敗戦で中国・上海の東亜同文書院大学などから引き揚げてきた、同大学最後の学長である本間喜一らによって、豊橋予備士官学校本部・歩兵隊跡地が（市長ら地元の協力もあって）愛知大学として再生されたのにともない、官舎も愛知大学の「公館」として生まれ変わることになったのである。

２．愛知大学創設による転用と「一大事」

・師団との因縁と「夜の学び舎」としての存在

第十五師団をもととする旧陸軍施設跡に1946（昭和21）年11月創設された愛知大学は、中部地方初の法文系大学となり、同跡地に市街地より移転してきた豊橋中学（現時習館高校）ほか各学校ともども、豊橋が「軍都」から「学都」に変身する切り札としての期待をになった。

ちなみに、愛知大学の初代学長になった林毅陸（きろく）（元慶応義塾大学塾長･東亜同文会理事）は、田中国重師団長と同じくワシントン会議派遣随員も務めていた。また、第３代学長となった小岩井淨（元東亜同文書院大教授）の妻で、中国大陸では婦人従軍記者として名を馳せた多嘉子（旧姓山岸）は、十五師団と同時に師団が廃止された新潟県高田（現上越市。多嘉子の郷里）の旧師団司令部に、敗戦後引き揚げてからの一時期居住していたのであり、創成期の愛知大学で重きをなした各人のなかには、旧陸軍施設や十五師団・師団長との“因縁”があった人物もいた。

愛知大学の創設時、管理元の豊橋市の厚意により提供された旧師団長官舎､すなわち｢愛知大学公館｣は、林・本間喜一・小岩井各学長をはじめとする教職員の、長短期両方における宿舎として、戦後の住宅難のなか重宝され､本間や小岩井夫妻らは家族で居住した（専属の賄い職員も配置）。そしてそこでは、教員を慕う学生との交流も自然に行われ､「愛大の夜の学び舎」とも称されたのであった。

・1950年代初頭の「公館接収問題」

創設後豊橋の地に根づきつつあった愛知大学の、全体を揺るがした最初期の一大事が、1950年11月１日に来学した占領軍係官（豊橋市長・名古屋財務局員も同行）の、朝鮮戦争勃発にともなう日本の再軍備に関連した「警察予備隊（のちの自衛隊）宿舎に使用するため公館を接収する」との声明であった。

これに対してはすぐさま、就任まもない本間喜一学長や、小岩井淨法経学部長らが「公館と学生の民主的結びつきから」「理想教育を行うために公館はぜひ必要」との請願を出したのであり、続いて小岩井夫人の多嘉子が個人の名で、マッカーサー占領軍司令官の

氏名	在任期間	備考
林　毅陸	1946.11.15 ～ 1950. 6.22	
本間喜一	1950. 6.23 ～ 1955.11.14 1959. 4. 1 ～ 1963. 2.17	小岩井学長の逝去により再就任
小岩井浄	1955.11.15 ～ 1959. 2.19	
脇坂雄治	1963. 4. 1 ～ 1967. 3.31	
玉城　肇	1967. 4. 1 ～ 1969. 5.12	
山田文雄	1969. 6.20 ～ 1970. 5. 7	
細迫朝夫	1970. 5. 8 ～ 1972. 2.10	
久曽神昇	1972. 5.19 ～ 1984 .3.31	
浜田　稔	1984. 4. 1 ～ 1987. 9.17	
石井吉也	1987. 9.18 ～ 1988. 3.31	のち再就任
牧野由朗	1988. 4. 1 ～ 1992. 3.31	

〔表２〕愛知大学公館使用時の歴代学長

（1946年～ 80年代末）

・愛知大学公館の使用が休止となった具体的な時期については未確認であるが、同館内の遺留品や関係者の証言から推測して､1980年代末までを「使用期間」と設定した。実際はそれより前に休止された可能性もあるが、最大限取った範囲として理解されたい。
・表内の歴代学長には、公館に常時居住･滞在していた人とそうでなかった人がいるが、「公館が活用されていた時期の学長」として、便宜上区別せずに当該時期の全員を掲載した。

ジーン夫人宛てに日本文と英文の手紙をそれぞれ送った。若江得行教授が英訳したこの手紙には、「同じく女性であり主婦であられる貴女様にお訴え申し上げずに入(ママ)られない」「このことが愛知大学の学生に、ひいては日本全国の学生に、どのような影響を与えるものであるかを考えるのでございます」などとの、多嘉子の熱誠にあふれた文言が若江の名訳によって連なっていて、その効果であろう、10日後には司令部副官の名で多嘉子宛てに「このことは誤解であって、もとより接収する意思はなかった」とする返書が届いたのであった(13)。

その返書の一節にあった、「学校教育に便利ならば立ち退かなくてもよい」との占領軍の理解に対し、本間学長はすぐに謝意を学内新聞で述べ、

嵐霽(は)れ心に協(かな)う秋の空

という一句も添えられた(14)。

多嘉子自身､のちの新聞記者のインタビューに対し、こう答えている。

―ときに戦後、愛知大学の公舎(ママ)が米軍に接収されかかったことがありますね。あのときあなたがマッカーサー夫人あてにだした陳情文は一世一代の名文だといわれていますが…。

まあ、おはずかしい。あれは(昭和)25年の秋のことですが、東三地方唯一の(大学の)愛大を守るために一教授夫人の立場から真情(心情カ)をのべただけで。でもさすがにマ夫人ですね。わずか一週間で善処する旨の返事があり、お陰で接収を逃れることができました。翻訳は愛大の若江教授にお願いしましたが、あの方の名文がよくマ夫人の胸をうったのでしょう。(15)

熱意と自信によるチームプレーの精華といえよう。

3．愛知大学公館としての存在

・接収回避後の公館の微妙な“立ち位置”

愛知大学公館はこうして進駐軍の接収を免れ、その１年後に調印されたサンフランシスコ平和条約により、日本は占領状態から解かれたが、愛知大学はその後も、1952年の学内への警察官の立入り事件（愛大事件）や、1963年の富山県薬師岳での山岳部遭難事故という“試練”を経たうえで、発展を確立させていくことになる。その間も公館は、豊橋校舎の本体ともども敷地・建物が愛大当局に買い取られ、本間喜一や小岩井夫妻ら教員（およびその家族）と学生とのかけがえのない交流の場として、重要な役割を演じつづけた。

その後しだいに豊橋校舎周辺の宅地化が進み、教職員住宅も公館隣りに鉄筋のものが新築されたのちも、愛知大学公館は遠方から来学した外部講師の宿舎として使用された。愛知大学のシンボル的存在として、刊行物の表紙を飾りつづけてきた本館（現大学記念館、元第十五師団司令部）に比べ、公館はキャンパス自体からは離れているがゆえ、いささか地味な存在となったが、地元での「皇后伝説」は戦前の「軍都豊橋」を象徴するエピソードとして残りつづけ、小高い丘の上に立つ公館の風格は、やはり独特なものがあった(16)。

ただ一方では第十五師団当時と同様、施設の用途としての性格上から、公館は愛知大学の各年の案内文には掲載されず、関係教員の逝去や引退も相まって、一般の教職員や学生からは認識が薄くなっていった。そして公館自体の老朽化や、宿泊施設の面での陳腐化により、外部講師の宿泊も豊橋市街地のホテルでなされるようになり、公館の存在は、（新たな名古屋校舎を現みよし市に建設した）愛知大学のなかでいったん忘れられていく。

・公館の復活に向けての動き

外来講師宿舎としての役目も1990年までには終え、使用休止の状態となった愛知大学公館であるが（結果的に使用されなくなった模様）、文化財的価値からの“復活”を望む声が、1993（平成５）年の本館の保存決定と連動する形で学内外より何度も出てくることになり、96年の愛大創立50周年の際には、関連刊行物に公館の写真もかなり掲載された。

なかでも特筆すべきは、2005年の愛知万博（愛・地球博）開催の前に、公館を買い取って万博の迎賓館にしたいとの提案が地元の有力者から上がったことである（すなわち、元師団長官舎の「迎賓館化」構想は、敗戦直後の再来ともいえる）。そして実際に話は進んでいたものの、当人の急逝により立ち消えとなってしまったことは、かえすがえすも残念なことではあった(17)。

しかし、2006年に豊橋市制100周年記念で製作された映画「早咲きの花」では、公館も（戦前の病院の設定で）ロケに使われたのであり、有志の愛知大学職員による公館の写生画は、何度も展覧会の一角を飾っている(18)。

また、公館の建築学的な価値に対する見直しも進み、例えば地元の豊橋技術科学大学の教員（当時）による調査報告では、

> 旧陸軍の他師団の師団長官舎がほとんど現存しない中にあって、創建当初のまま残された第十五師団長官舎は貴重な遺構であり、明治末期の和洋館併設の木造住宅建築の好例としてその建築的価値も高い。(19)

と結ばれている。そして、「卒寿」にあたった2002年に豊橋市の指定文化財となった公館は、2012年５月に100歳を迎えてからは、直後に公開見学会が開催されたり、2014年初めに外壁の修復がなされたりして、また新たな再生の時を待ちつづけている。今日も公館は、（冒頭に述べたように）みよしに代わって誕生した「三代目」名古屋キャンパスのビルともども、新幹線の車窓から「愛知大学」の存在を示すビューポイントとなっているのである。

おわりに

近年愛知大学公館の存在がクローズアップされてきた背景には、「戦後七十年」のこんにち“今後の証人”としての各種「戦争遺跡」が注目されてきたことがあげられようが、さらに愛知大学も2016年には創立70周年を迎えることになり、（新名古屋校舎の開設と本部の車道校舎への移転もあって）いま存在感の低下が危惧されている豊橋校舎を、「愛大発祥の地」として見直し、さらに新たな価値を見出すためには、公館の再認識は欠かせないものであろう(20)。

また、豊橋市の側から見ても、戦前の「軍都」としての存在および、戦後の「学都」への変身を目ざしたことの証しとして、師団長官舎および公館をめぐるエピソードは（「皇后伝説」に真実でなかった面があったにしても）特筆すべきものがあると信じている。

しかし、公館の歴史的経緯を示す資料については、写真ともどもまだ乏しいのが実情である。それを補うためには、学内外の「昔の官舎・公館を知る方々」の証言を集め、エピソードの吟味や裏付けをしていくことが急務となろうし、関連の情報や資料の提供もお願いしたいところである。

今後公館の去就がどのようになっていくかについては、不明な段階にとどまっていることは否めまいが、（豊橋市も動きはじめているとのことであり）注目度は徐々にながら上がっているように感じられる。師団長官舎と愛大公館のいずれに重きを置くにせよ、「100歳を経たこの建物」が装いを新たにする日が来ることを願っている。

註

(1)　つづけてこの書では、「この建物の設計者は未詳であるが、洋館の外壁は下見板張、軒廻に蛇腹持送を持つ寄棟桟瓦葺の建築で張出窓や赤レンガの煙突がアクセントになっている。間取は、質の良い洋間三室とそれに続く広い座敷を公的な部分とし、背後に和風建築が接続し、私的な和室、台所など住居部を配置している。洋室部分には、美しい天井中心飾や暖炉が残り、よく当時の意匠を伝えている。それに接続する大きな座敷も質のよい仕上で豪快な空間をつくりだしており、洋館と日本館を巧みに組み合わせた建築である」（本文での引用部ともども47頁。畔柳武司氏執筆）と、建築・意匠上の特徴を述べている。

(2)　その“軍都だった時期”に編さん、刊行された、愛知県渥美郡役所編『渥美郡史』（名著出版、1923年刊、72年復刻）では、「大正六年八月六日より同七年八月九日に至る間、久邇宮邦彦王殿下が第十五師団長として、高師の師団長官舎に御起居遊ばされ、良子女王殿下も時々御出になられた事（…）は、実に本郡の光栄とする所である」と記されている。

(3)　公館建築100周年にあたった2012年の６月から７月にかけて、愛知大学東亜同文書院大学記念センター（以下「記念センター」）主催で記念の見学会・展示会が開催されたことは本文でも後述するが、私も展示パネル文原案作成や見学案内で参加した。本稿は、その時の自らのパネル文原案を土台にして再構成したものであるが、同展示会・見学会については翌13年に記念センターより刊行された『同文書院記念報 VOL.21』60～85頁に、「愛知大学公館 特別展―築後100年の洋風建築をめぐって―」として報告されているので、併せて参照されたい。

(4)　豊橋地区の旧第十五師団および、その「衛戍地」の戦後の転用について、私は新刊の河西英通編『地域のなかの軍隊３ 中部 列島中央の軍事拠点』（吉川弘文館、2014年）に「東海軍都論」として一編を寄稿した。

(5)　豊橋市史編纂委員会編『豊橋市史 第三巻』（豊橋市、1983年）321頁。ただし所在地についての詳細は未確認。

なお、執筆者の兵東政夫氏（豊橋市で教育長などを歴任し、近年他界）は豊橋での軍事史を各史書で開拓した方であり、生前の最後には『軍都豊橋―昭和戦乱の世の青春に捧げる―』（自費出版、2007年）を上梓された。

(6)　例えば、新潟県高田（上越市）の旧第十三師団（これも軍縮で廃止）長官舎は洋風二階建てであり、福岡県久留米市の旧第十八師団（軍縮後第十二師団）長官舎は和風平屋建てであった。両市の旧官舎とも現在、市当局が関わる形で保存公開されている。

(7)　第十五師団の進駐によって「軍都」とのちに称されるようになった豊橋地区では、従来の第十八連隊ともども各部隊の施設や演習風景の写真が、絵葉書のセットとして何度も刊行された。当時の豊橋にとって軍隊が重要な観光資源の一つであったことを物語るものであろうが、それらの中には師団長官舎のものは見つかっていないようである（2006年に豊橋市二川宿本陣資料館で開催された企画展「絵葉書のなかの豊橋」にはない）。師団進駐記念としてのものが出た1908年には、まだ官舎は建設されていなかったが、官舎完成後も本文に記したようにその私的な性格から、絵葉書になるには至らなかったことも理由に考えられよう。

　しかし、師団長官舎の存在が一般に対して伏せられていたということではなかったことは、当時の地図に官舎の位置が記されていたものもあることからわかるのであり、何よりも「良子女王（→皇后）伝説」が、官舎への意識を示しているのである。

(8)　この「伝説と真実との相違」は、註３の見学・展示会開催の際に確認したことであるが、スタッフの一人であった森健一・記念センター職員が当時の新聞記事を調査し、「新聞報道からみる良子女王来豊記」としてその『同文書院記念報 VOL.21』（以下『記念報21』）179～183頁で報告している。そこでは、良子女王が皇太子妃内定にともない1918年春に学習院を退学する前に、１か月間豊橋に滞在して愛知県下を訪問されたことも記されていて、今後も追究すべきテーマといえる。

(9)　田中国重については、拙稿「田中国重豊橋師団長の軍縮観」（『愛大史学』第３号、1994年）を参照されたい。

(10)　第十五師団ほか４個師団の削減を断行した1925年の軍縮は、実行した陸軍大臣の名から宇垣軍縮と呼ばれているが（陸軍軍縮としては３度目）、宇垣の真意は部隊削減による捻出経費で陸軍の編制・装備を改善することであり、さらに廃止した部隊の所在地が経済的影響をうけることで（当時多かった）陸軍への批判をなくすためでもあった。その「所在地」の一つであった豊橋での実際の対応については前掲註４「東海軍都論」のほか、「宇垣軍縮と“軍都・豊橋”」（『愛大史学』第４号、1995年）など一連の拙論に記述した。

(11)　防空壕は地表の空気取り入れ口ともども現存していて、公館関係者の証言によれば、別棟を取り壊したうえで構築されたという。非常時には地下陣地となる役割も担っていたのであろう。

(12)　『中部日本新聞』（現中日）1945.12.23付「尾三短信」に、「元師団長官舎迎賓館に」との見出しで、「豊橋市山田町の元師団長官舎は県で迎賓館に指定して豊橋市の管理になったが、市では旅館の焼けてしまった折柄高官が来豊した場合の宿舎に当てる」とある。さらにその後、市長公舎として位置づけられたようである。

(13)　加藤勝美『愛知大学を創った男たち―本間喜一、小岩井淨とその時代―』（愛知大学、2011年）398～399頁。加藤氏は定期的に愛知大学を訪問し、じかに現物資料を確認した上で同書を執筆した。本間喜一からの嘆願書および副官よりの返書は前掲註８『記念報21』66～68頁に、展示会のパネルを流用する形で写真を掲載（嘆願書は本間長女の提供。返書は愛知大学記念館内に展示中）。

(14)　同前加藤著399頁。加藤氏は続けて、「この『協う』には（…）小岩井多嘉子の協力への（本間の）感謝も表したのかもしれない」と推測している（400頁）。

(15)　『中部日本新聞』1956.2.9付「火バチを囲んで⑪ 愛大学長夫人 小岩井多嘉子さん」。多嘉子は、（この記事の３年後に）夫の小岩井淨学長が在任中に世を去ってからも家族とともに公館に居住していたが、1966年に館内にて脳出血で倒れて逝去した。

(16)　大規模な改築や改装はなされなかった公館であるが、1970年代の一時期には洋館部の外壁が白系統からピンク色に塗り替えられたことがあった（カラー写真が現存）。

(17)　これも前掲註８『記念報21』70頁に、改築案の図面をパネル流用で掲載。大胆な改装が提案されたことがわかる。

(18)　旧陸軍の建物を使用しつづけてきた愛知大学豊橋校舎は、以前から軍隊を舞台とした映画の撮影が行なわれていたのであり、この2006年には記念館（旧本館）などもNHK連続テレビ小説「純情きらり」のロケに使用された。

　公館の絵を描きつづけている職員（山口恵里子氏）は『中日新聞』記事でのインタビューで「私の絵を見て、公館に興味を持ってくれ

る人が保存に向けて声を上げてほしい。築百年の建物を修復するには今がぎりぎりの時期」と語っている（2012.5.3付「愛知大公館 私は描く」）。

（19）坂本勝比古・小野木重勝「旧陸軍第十五師団長官舎―旧陸軍第十五師団兵営遺構の研究（２）―」（『2000年度日本建築学会関東支部研究報告集』、2001年）572頁。同論の（１）は「旧陸軍第十五師団司令部庁舎」（1993年）。

建築学的に愛知大学公館を調査、紹介した書論は同論や、本文「はじめに」および註１であげた『東海の近代建築』のほか、愛知県史編さん室編『愛知県史 別編 文化財１ 建造物・史跡』（2006年）がある。

（20）1997年ごろ、当時愛知大学に滞在していたハンス・G・ラングリーガー氏は、学内資料としての論稿「愛知大学（豊橋）『公館』その建築史的研究」（未発表。本文はドイツ語文）の「結語」で、

> 造形という視点から見れば、『公館』は日本における西洋文化の吸収過程を表しているものとみなせるであろう。今日でもこの建物はこうした吸収の範例といえる。なぜならば日本的な形式も西洋的な形式も、問題を含む結果に陥ることなく両者の統合が可能なことを、その形態において示しているからである。
>
> 「公館」は建築理論の視点からすれば、世界論的思想に裏打ちされた調和の観念を象徴してる。そればかりか、その手本ともいえるものの一例である。そこにおいては大きな隔たりを持った文化が邂逅しているが、その邂逅は見た目においても様式の雑居に陥ることなく、調和をなすものとなっている。ここに見られるような異なる文化の幸福な出会いが、将来においてもこの建物の中でなされることを願ってやまない。

との見解を示している（データ末尾。筆者自身の記か訳者によるものかは不明）。

（付記）私が現在週に数回勤務している愛知大学東亜同文書院記念センターでは、外部からの補助金を得た上で公館を紹介するブックレットの製作を始めている。私もそのスタッフの一人であるが、本稿はその業務に携わるにあたって、個人のものとして自らの調査や見解をまとめたものであることを、註３で記した経緯を含めて理解されたい。ブックレットの刊行は、本稿とほぼ同じ2015年春を予定している。

（2014.11.20脱稿）